

浄土真宗本願寺派の法要形式に関する一考察

佐藤道子

はじめに

現在、日本における仏教各宗派の宗勢を、かりに在家信者数という基準に拠って比較してみると、仏教系一五九宗派の信者総数八四三四万九五三二名の中、浄土系二四宗派の信者合計数は二〇七〇万三三二六名で、仏教信者総数のほぼ二四・五%を占め、日蓮系三七宗派の三一三万八二四九名（三六・九%）に次ぐ宗勢を示している。また浄土系諸宗派の中、浄土真宗本願寺派と真宗大谷派という、いわゆる東・西本願寺を本山とする二派の信者数は、本願寺派六九〇万七四四〇名、大谷派六一五万〇一四一名で、浄土宗の五九六万七〇〇〇名と勢力を三分する。宗派単位で比較すると、本願寺派は日蓮正宗・曹洞宗に次ぐ信者数を擁し、踵を接して大谷派と浄土宗が続く。だから、浄土宗・浄土真宗本願寺派・浄土真宗大谷派という浄土系三宗派を、わが国における仏教教団の雄と称しても過言ではない。（以上の統計数は、文化庁編『昭和53年版宗教年鑑』による）。

浄土思想は、わが国において新しい宗教的生命を獲得し、新宗派の樹立と広汎な地域・階層への、勢力の浸透を実現させた。現在全国各地に伝存する念仏踊をはじめとする各種の念仏芸が、もと庶民勧化の手段として生まれ、それが信仰的な行事から芸能へと多岐に展開し発展したことを考えると、たち戻ってこの大教団の現状を、仏教行事という面から把握しておくことも必要なことと思う。かつて、僧俗共に仏を念じて忘我の境に達した信仰的なエネルギーは、今その残影をも見ない。しかし儀礼形式として固定した現在の形もまた、その終極の一形態と考えられるからである。

先に、日本仏教における祖師会そしえの流れをたどり、各宗派祖師会の、勤修法要についての考察を行なったが、浄土教関係では、浄土宗の「御忌会ぎよぎみえ」と浄土真宗の「報恩講ほうおんこう」で勤修される法要について、その特色や天台宗の法要形式からの影響を指摘した。⁽¹⁾

法要というものの構成次第は一定ではなく、多様の形式があるが、決して恣意的に案出されるものではない。既存の

然るべき形式を範としながら、目的に相応した特定の形式が定められ伝承されてゆくのが常である。だから、宗派ごとに法要形式の種々を確認し、次いで関連宗派とのかかわりに考察を及ぼしてゆくと、最終的には日本仏教の流れの一面を各宗派の法要形式の比較という方法で把握することができはすである。そこで、祖師会の比較考察をはじめとして、この方法による分析を長期的に試みることを意図した。本稿は、その試みの一段階でもある。ここでは、まず法^{ほうよう}・法要などと呼ばれる仏教儀礼に関してその組織の概略を述べ、次いで浄土真宗本願寺派の法要に考察の範囲を限つて、この宗派の法要諸形式にみられる特色と、天台宗の法要形式との関連について考察する。

注1 祖師会の史的研究〔『芸能の科学』9〕

法会と法要

仏教行事を大きく二分して、寺院行事と在家行事とに分類する。寺院行事には、各寺院の本尊仏や宗派の祖師・先師などを供養する法会とか、經典の講讃、僧侶の勉強・付法のための法会など、仏・法・僧の三宝を対象とする各種の行事があり、在家行事には、盆・年忌供養など、先祖供養を主とする在俗諸家の行事がある。ここでは考察の範囲を寺院行事に限定して、在家行事には触れない。

なお、仏教行事に関する用語に統一の概念規定がなく、解釈にずれを生じる場合があるので、ここでは、左の用語を左の規定に従って用いる。

- ・ 法会……特定の目的を以て営まれる寺院行事
 - ・ 法要……法会の目的を表明し、それを達成する手段として勤修される仏教儀式
- 法会には明確な目的——たとえば追福供養とか修善・祈願など——がある。その目的を成就するために、目的にふさ

わしい法要が勤修される。これが寺院行事の基本的な形態である。その目的に従って、毎月営まれる法会もあれば、一年に一回催される法会もあり、また数年に一回しか催されぬ法会、臨時の法会など、その軽重もさまざまであり、その規模もまた種々多様である。

視点を法要に置いてみる。法会の規模や軽重の差に従って、法要にも規模の大小や構成の広略に考慮が払われるのは当然で、記念すべき大法会には、形式の整った多人数で勤める法要が勤修されるし、日常性のある小法会には、小人数で略式の法要を勤修するのが一般である。また、月例の法会などでは、一法会に一法要が勤修されるのが通常だが、宗祖の遠忌とか開宗記念・堂塔落慶などの大法会になると、一法会に複数以上の法要が勤修されるし、特別な場合は、一法会が何日かにわたる大がかりなものとなる。しかし、法会は必ずしも法要だけで構成されるわけではない。場合によって奉納舞楽・奉納和讃・関連民間行事など、在家の人も交えた種々な構成要素が加えられて、大小さまざまな規模と形式をもった法会が成立する。

右に述べたように、法要は法会の構成要素の一つに過ぎないけれども、一面、法会の性格を決定する最も重要な要素であって、各種法要形式の比較分析は、寺院行事研究に欠かすことができない。

先に、法要を「法会の目的を表明し、達成する手段として勤修される仏教儀式」と規定した。その儀式は、規模も内容も種々様々だが、それをかたちづくる要素の最小単位となるのは、多くの場合、広義の声しやうみやう明一曲を伴う一区切の作法である。そのほかに、特定の意味をもつ一区切の所作や法具の音、奏楽などが単位となる場合もあるが、今は声明以外の単位要素については触れず、主たる単位要素である声明について述べる。

声明という言葉は、狭義には梵語・漢語の唱句をもつ外来の仏教声楽を指して用いられるが、ここでは和文や訓読の文を含めた広義の仏教声楽を指して用いる。ところで、この声明は、曲ごとに唱句によって莊嚴・礼拝・讃嘆・念誦・懺悔・回向・祈願・論義・教導・法楽など、種々の内容を表現する。だから所用声明何曲かの選定とその組合わせ方に

よって、特定の趣意を表明する法要形式が成立する。また、これに行道・礼拝・呪法などの所作を伴うと、体的な具体性が増して趣意の表現がより明確になり、法要の構成に起伏が生まれる。法要形式の種々は、このようにして成立し、固定すると考えられる。

もちろん仏教儀礼とひとくちに言っても、宗派によって基本的な理念を異にするし、所用声明や所作、服装や用具、あるいは道場莊嚴の方式など、それぞれに異同があるから、同一目的で営まれる法会（たとえば本尊供養会・釈迦誕生会など）であっても、勤修法要の形式次第には必ずしも汎宗派的な統一があるわけではなく、各宗それぞれに任意の法要を勤修する。そこに当該宗派の特色や主張を見ることができ、またおのずから帰結してゆく方向性などをみることもできる。そのゆえに諸宗派を通しての比較研究の意味が生まれるわけである。

本願寺派の法要

(一)

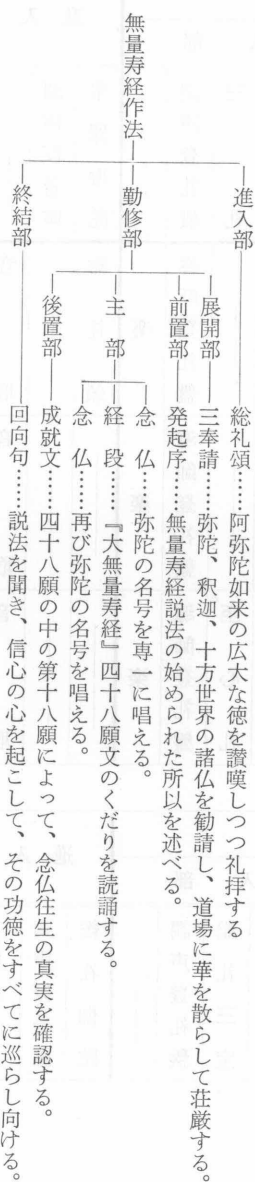
表―Aは、『声明集解説』（勤式指導所編）に記載してある浄土真宗本願寺派における現行の法要次第を、再構成して一表に作成したものである。本願寺派では、昭和六年に新しい勤行形式が制定されて今日に至っている。表―Aの諸形式も、安政四年版『声明品集』・明治二十一年刊『龍谷唄策』・明治四十三年刊『梵唄集』などに拠って作製されたことが明記されている⁽¹⁾。龍谷大学図書館所蔵の天明五年版『声明品』（前集・後集二冊の中、後集を欠くが、前集の末尾に後集所載の曲名目録が記載されている）所載の曲目や、明治四十三年刊『梵唄集』に掲げる法要次第・博士^{はかせ}（旋律記号）などを参照すると、近世以降の法要には天台宗の声明や法要形式の影響が明らかであり、現行の形式は、その骨格を受けつぎながら時代に即応して取捨した結果の形式と判断できる。だから、ここでは本願寺派の法要形式と天台宗の法要形式とのかわりについて新知見を加えることを目的としない。ここで意図するのは、浄土真宗本願寺派の現行

退出部			勤修部										進人部			構成	分類												
導師平床			導師禮盤			導師平床			導師禮盤			導師平床			導師禮盤														
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		導師登札盤	回向句	成就文	念段	經段	導師降札盤			發起序	導師登札盤	三奉請	導師降札盤	止	導師登札盤	總札頌	止	諸僧入堂	音取	諸僧入堂	行事鐘	無量壽經作法			
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		導師登札盤	回向句	成就文	念段	經段	導師降札盤			發起序	導師登札盤	三奉請	導師降札盤	止	導師登札盤	總札頌	止	諸僧入堂	音取	諸僧入堂	行事鐘	無量壽經作法 (第一式)			
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		導師登札盤	回向句	念段	經段	念	導師降札盤			般舟讚前序			至心	導師登札盤				音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	觀無量壽經作法			
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		導師登札盤	回向句	名義	念段	經段	念					三奉請	導師降札盤	止	導師登札盤				音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	阿彌陀經作法		
																	漢音小經作法												
諸僧退出	持念	導師降札盤										回向句	短念	短念	漢音小經				導師登札盤	總札伽陀	持念		諸僧入堂	音取	諸僧入堂	行事鐘	誦經作法		
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			讚				止	導師登札盤	總札頌			音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	讀弘揚作法	
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			重誓偈				止	導師登札盤	總札頌			音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	重誓偈作法	
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			十二光讚			頂禮文	止	導師登札盤	總札頌			音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	讚阿彌陀偈作法	
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			念佛正信偈	念佛			頌讚	止	導師登札盤	五眼	止		音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	大師影供作法
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			念佛正信偈	念佛			頌讚	止	導師登札盤				音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	大師影供作法 (第二式)
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			入出二門偈				頌讚	止	導師登札盤				音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	二門偈作法
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			正信念弘偈	總序			止	導師登札盤					音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	廣文類作法
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂								回向句			歡德文	式文念弘和讚	式文念弘和讚	表白	至心	止	導師登札盤	總札頌			音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	報恩講作法
諸僧退出		導師降札盤										回向句			三選章			頂禮文	導師登札盤			持念		諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	円光大師會作法		
諸僧退出	持念	導師降札盤										回向句			念太子奉讚			頂禮文	導師登札盤			持念		諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	上宮太子會作法		
諸僧退出	持念	導師降札盤										回向句			念早引和讚			頂禮文	導師登札盤			持念		諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	奉讚早引作法		
止	導師・結衆退出	導師降札盤	樂									回向句			念佛	導師登札盤	誦讚	三奉請	至心	止	導師登札盤	召請	止	導師・結衆入堂	音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	淨土法事讚作法
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		回向句	莊嚴讚	導師登札盤			誦讚	導師降札盤			念	導師登札盤	三奉請	導師降札盤	止	導師登札盤				音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	五念念弘作法	
諸僧退出	止	樂	導師降札盤	樂		回向句		導師登札盤			念	導師降札盤			十二札			至心	止	導師登札盤	總札頌			音取	諸僧入堂	諸僧入堂	行事鐘	十二札作法	

諸法要形式の系統別分類と、天台宗の形式との比較対照という作業から、両宗の法要形式のかかり方を客観的に確認し、あるいは本願寺派本来の法要形式を確認することにある。

表—Aに掲げたとおり、『声明集解説』に記載されている法要形式は二十種類を数える。これを、A—IからA—Vの五グループに分けた。

A—Iは、浄土系諸宗派の所依の經典である無量寿經・觀無量寿經・阿弥陀經——いわゆる浄土三部經——の読誦作法である。經典の読誦はどの宗派でも行なうことだが、所依の經典——教義のよりどころとなる經典——は特に重んじて、読誦作法を別に定めることが多い。浄土真宗の場合もその例に洩れない。試みに表A—Iから『無量寿經作法』^{ひりようじゆきようほう}を取上げ、その勤行の進行を追って構成部分それぞれの内容を略述すると次のようになる。なお、法要の組織に関しては、横道萬里雄氏が周到な分類を試みられており、本稿でも、その分類法および分類名称を踏襲させて頂いた。



經典の読誦と名号の唱誦とを中心部に据え、その前には、道場を莊嚴して諸尊を勧請する作法と經典読誦の意義解説の部分配し、その後にはこの一經の枢要を確認する部分を配し、終結部で法要の功德をあまねく巡らし及ぼすことを願う。構成は明快、簡にして要を得ている。また、いかにも浄土系の宗派らしい内容である。所依の經典読誦の作法だから当然といえは当然であり、この宗派の法要形式を代表する一つと数えてためらいはない。

退 出 部				勤 修												
				終 結 部					後置部		主 部			前置部		
諸僧退出	調声降礼盤			別 回 向	始 經 自 我 偈	回 向 伽 陀	七 仏 通 戒 偈	三 礼	後 唄	回 向	甲 念 仏	經 段	甲 念 仏			
諸僧退出	導師降礼盤	楽	導師登礼盤			回 向 句			成 就 文		念 仏	經 段	念 [■] 仏	導師降礼盤	発 起 序	導師登礼盤
諸僧退出	導師降礼盤	楽	導師登礼盤			回 向 句			名 義 段		念 [■] 仏	經 段	念 [□] 仏			
諸僧退出	導師降礼盤	楽	導師登礼盤			回 向					念 [△] 仏	經 段	念 [△] 仏	導師降礼盤	般 舟 讚 前 序	

退 出 部				勤 修												
				終 結 部				後 置 部								
諸 僧 退 出	調 声 降 礼 盤			別 回 向	始 經 自 我 偈	回 向 伽 陀	七 仏 通 戒 偈		後 唄		十 方 念 仏	經 段	十 方 念 仏			

次に、表―Bイとして『無量寿経作法』と同一グループに属する三法要の構成次第を改めて掲げ、これと対比する意味で最上欄に天台宗の『常行三昧(例時作法)』の次第を併せて掲げた。浄土真宗において『観無量寿経作法』と『阿弥陀経作法』は『無量寿経作法』と同様の意味と比重をもつ。この三法要を比較すると、それぞれに導入部での礼文の有無とか、展開部での奉請讃嘆の文の有無など、ごくささやかな相違以外はほぼ同一の次第で進行しており、その構成上の類似性は明らかである。三法要の性格と比重の共通性を考えれば当然といえる。ところで、これらを天台宗の『常行三昧』と比較してみると、これまた明らかな共通性が見られる。

『常行三昧』と『総礼頌』のように、構成単位の名称を異にしているも、意義的に照応するものを同軸の欄に記載すると、天台宗『常行三昧』の中枢部をそのまま踏襲し、前後を取捨選択して成立したのが、本願寺派の『無量寿経作法』をはじめとするA―Iグループの形式と考えられる。一見、いかにも浄土真宗らしい色彩をもつと見えた法要だが、このように比較してみると、明らかに天台宗の法要形式を母胎とした派生形式であることがわかる。大まかな輪廓を既成の形式に借りて儀式としての整齊をはかった上で、奏楽を加えて華やかさを演出し、導入部や終結部を大胆に刈込んで勤修部の中枢である『読経』と『念仏』に力点を置き、中枢部の意義を確認し際立たせるべく、その前後に〔発起序〕や〔成就文〕などを配置する。以上のような方法で自宗の理念を盛込み、独自性を明確に表明したと理解できる。

一般に、先行の法要形式に範を求めて新しい法要形式を考案する時、祖型をそのまま踏襲して唱句だけを変える、という方法を用いて原形式を重視する場合もあり、また祖型の一部を切捨てて他をそのまま踏襲する場合や、祖型に取捨・増幅などの手を加える場合など、扱い方に種々の方法がある。その度合によって、単なる省略形式から意義・目的を異にする新形式に至るまで、幾多の法要形式が作り出されるわけだが、A―Iグループの場合は先に述べたような工夫によって、祖型の模倣に留まることなく新形式を完成したと見る。以上、法要の構成形式という角度からA―Iグループの考察を行なった。

視点を变えて再びこのグループを検討してみよう。表B―ロとして掲げた天台宗『法華三昧ほつげさんまい（法華懺法）ほつげせんぽう』の構成次第を見て頂きたい。この法要形式は表B―イの『常行三昧』の形式に非常に近い。後に述べるように、この二法要は天台宗における日々必修の勤行で、朝に『法華三昧』を、夕に『常行三昧』をと、照応して勤修するものである。だから形式上の類似性も当然あり得る。しかし、決定的に異なるのは、『法華三昧』は中樞部が〔敬礼段けいらいだん〕・〔六根段ろくこんだん〕・〔四悔しげ〕〕にあって、懺悔・礼拝を目的とする法要であり、『常行三昧』は中樞が〔念仏〕・〔経段〕にあって、読経・念仏を目的とする法要だという点である。だから、『法華三昧』の〔十方念仏〕・〔経段〕は、『常行三昧』のそれと同じ位置にあるけれども、実は、中樞部に添えて、その意義を確認し敷衍するための後置部分として機能しており、この部分の、法要に占める比重は『常行三昧』に比べて軽いと考えてよいと思う。読経を目的とし〔念仏〕・〔経段〕を中樞部として構成されている浄土真宗A―Iグループの法要形式について、あえて『常行三昧』の形式を範としているとのみ考えたのは、以上の理由による。

しかし、『法華三昧』とのかかわりを否定するわけにはいかない。A―Iグループの法要には、部分的に『法華三昧』の旋律が用いられているからである。表B―イに△印を付した部分がこれに相当する。116ページの掲載写真にその具体的な一例を示したが、唱句は異にながら、旋律をそのまま、あるいは多少アレンジして転用するという方法を用いている。もちろん法要の形式上の範となった『常行三昧』の旋律を範とした部分もある。これは表B―イの該当部分に□または■印を付した。なお、■印は、対比例としては掲げなかった『常行三昧』△第一式Vの〔合殺〕の旋律を範とした部分である。

五法行の要略

法華懺法

一心敬礼十方一切常住佛

一心敬礼十方一切常住法

一心敬礼十方一切常住僧

東 中 西 南 北 上 下 左 右 前 後 中 外 内 高 低 大 小 長 短 高 低 大 小 長 短

觀無量壽經作法

至心礼 律曲 一越調

至心敬礼 南無常住佛

至心敬礼 南無常住法

至心敬礼 南無常住僧

同 同 同

礼 礼 礼

ホク

ソク

フ

ホク

ソク

フ

旋律の転用という面から見れば、『観無量壽經作法』は『法華三昧』の、『阿弥陀經作法』と『無量壽經作法』は『常行三昧』の影響を受けていることになる。所依の經典の読誦作法という目的の共通性と、構成形式上の共通性によって没個性となり勝ちな三つの法要の、対応部分のフシを変えろという方法でそれぞれに独自性を与え、変化を持たせるという工夫がここに見られる。

なお、右の三法要の中、『観無量壽經作法』は、天台宗の『法華三昧』に基づいて成立した浄土真宗の『阿弥陀懺法』を祖型として作成されたという⁽²⁾。先に述べたように、『法華三昧』は懺悔・礼拝を目的とする法要であり、主部に〔敬礼段〕・〔六根段〕・〔四悔段〕を配置する。『阿弥陀懺法』は、その目的と形式を共に踏襲して作成されている。この『阿

『弥陀懺法』の中枢部分を切捨て、後置部分である読経と念仏の部分を生かして現在の『観無量寿経作法』が成立したという段取りである。この事實は、A—Iグループの法要形式をすべて『常行三昧』からの派生形式とみる私の考え方と矛盾するようだが、『阿弥陀懺法』から『観無量寿経作法』が作成された時点で、その中枢部分を切捨てて後置部分を生かしたという選択の根底に、明らかな『常行三昧』依用の精神を見る。なぜなら、この場合の中枢部の切捨ては『法華三昧』から『阿弥陀懺法』に引継がれた懺悔の目的を捨てて、『常行三昧』が目的とする読経・念仏に転ずることを意味するし、後置部の採用は、必然的に『常行三昧』の中枢部の形式採用を意味するからである。

結論を確認すれば、本願寺派の浄土三部経読誦の法要は、形式の上では天台宗の『常行三昧』を範としている。また所要声明の旋律には、『常行三昧』と『法華三昧』双方の旋律が取入れられて、種類を同じくする法要に起り勝ちな単一化を防ぐ配慮がはらわれている、ということになる。

以上、A—Iグループの法要について、天台宗の『常行三昧』と『法華三昧』とのかわりを考察した。右の二法要の中、『法華三昧』は伝教大師最澄がその大綱を伝え、さらに慈覚大師円仁が精要を伝えたという⁽³⁾。また『常行三昧』は円仁が請来始行したという⁽⁴⁾。共に平安初期に中国から伝来した法要形式だが、仏教思想そのものが日本の仏教思想として浸透すると共に、この法要も叡山の法要として定着する。その過程で、本来別個に認識されていた二法要が、「例懺作法」と呼称する一对の作法と認識され、日王朝暮に勤める最も基本的な勤行として世に膾炙するようになった。

一方、浄土真宗では開祖親鸞には立教開宗の意志がなく、一向念仏（ひたすらに念仏を唱えること）を勧めることのみ専念したから、宗祖在世の間は法要形式というものの確立をみなかった。浄土真宗において法要形式が確立し、法会の執行が重視されるようになったのは、親鸞の没後、宗派としての態勢を確立し、宗勢の安定をはかるようになった八代宗主蓮如以後のことであったという。具体的な法式改制は、慶長七年（一六〇二）に東・西両本願寺に分かれ、慶

長一九九年（一六一四）に東本願寺が独立した後に行なわれており、一四代宗主寂如（一六五一—一七二五）から一五代法如を経て一九代本如（一七七八—一八二六）に至る頃までに、天台声明の撰取と共に本願寺派の諸法式の確立をみたという。⁽⁵⁾『例時作法』（『常行三昧』）が撰取されるようになったのも、文化年中のこととされている。⁽⁶⁾宗祖の意志にかかわらずなく、大宗派として確立したその存在を顕揚し莊嚴する必要を生じ、しかし一方には、在俗信者の理解のために難解を排して明解を求め、複雑を避けて単純を選ぶという基本姿勢を保たねばならぬ。ある意味で相反する条件を満たすのに、祖型として最もふさわしいのが天台宗の「例懺作法」であった。宗祖親鸞はもとより、浄土系諸宗派開創の諸師はすべて叡山に学び、天台教学の学習研鑽を基に浄土思想を確立展開した。この偉大な祖山における最も基本的な法要であり、一般の認識も深い。その形式を、浄土系の宗派が祖型として選ぶ必然性は濃い。

以上のような経緯で採用した法要形式を、可能な限り単純化して目的の明確化をはかり、所要時間の短縮もはかるという配慮と共に、一方では天台声明のだからで流麗な旋律を巧みに採用して、大宗派の儀礼にふさわしい重厚さと華やかさを印象づけるべく志向して完成したのがA—Iグループの法要形式だったと見る。

注1 『声明集解説』作法篇

注2 同右

注3 『慈覚大師伝』

注4 同右

注5 『本願寺史』第二巻

注6 『仏教大辞彙』

表—C

退 出 部			勤 修 部							進 入 部			構成 法要 名		
			終結部	後置部	主部	前置部	展開部		導 入 部						
諸僧退出	—	導師降礼盤	回向	念仏或ハ本尊呪	六種回向	読經	開經偈	法勸請	如来唄	三礼	導師登礼盤	—	總礼伽陀	諸僧入堂	読天台宗作法
諸僧退出	持念	導師降礼盤	回向	—	恩徳讃	經段	—	—	—	—	導師登礼盤	樂二七	總礼伽陀	持念	読本願寺派作法

A—IIは、一般的な經典読誦作法の諸形式である。A—Iが、浄土三部經という特定の經典読誦の作法であり、従って規矩の整った重厚さを志向していたのに比べると、このグループの形式には均衡のとれたつまじさがある。浄土真宗の法要形式の最も一般的な形と考えてよからうと思う。

このグループの中の『読經作法』は、従前、浄土三部經の読誦作法として用いられた形式だとい⁽¹⁾う。つまり、前述のA—Iに相当する形式であった、浄土真宗の法要の中の最も重要な一つと考えるべき法要だったわけである。浄土三部經読誦の法要形式が新たに制定された結果、旧形式は、より一般的な法要形式という性格を付与されて存続した。今、このグループにもA—Iグループと同じ方法を適用して表—Cを作成し、対比する形式として、天台宗の『読經作法』の次第を併せ掲げた。

一見して、ここにもA—Iグループに見たと同様の傾向を見るのである。まず、本願寺派の『読經作法』は天台宗の『読經作法』の形式を踏まえ、中枢部をそのまま引継ぎ、前後を取捨して簡略な形式としながら、取捨する段階で天台の要素を払拭し、浄土真宗らしい色彩への転換をはかっている。勤修部の最後に、「六種回向」に代えて「恩徳讃」という和讃を用い、「念仏」で釈迦牟尼仏名を唱える代りに、法要の始めと終りの「持念」で弥陀を念ずるなどがそれである。

A—IIグループにおけるその他の諸作法形式は、右の「読經作法」のバ

リエーションと考えられる。表Aによって明らかなように『漢音小経』の場合は、前後を切捨てて読経と念仏という中枢部のみで構成する。また『讃仏偈作法』・『重誓偈作法』・『讃阿弥陀偈作法』の場合は、導入部・主部・終結部に、それぞれ必要最小限の要素を布置して他を省き、代りに奏楽を加える。このように、A—IIグループでは一つの祖型から案出された形式が、更に次のバリエーション形式を生んだ。二段階を経た諸形式には、一見祖型との関わりを指摘し難い。先に考察したA—Iグループも、このA—IIグループも、經典読誦という同一の目的をもちながら、A—IIグループにのみこのようなバリエーションが指摘される。それは、A—Iグループが浄土三部經という、特に重んじられ、かつ比重を全く同じくする經典の読誦作法であるのに対して、A—IIグループの場合は一般的な經典読誦作法であり、従って經典相互の比重や関連性より、純粹に形式上の変化によってそれぞれの法要の性格づけを行うべく意図した結果であると考ええる。

以上、A—IIグループにも天台宗の法要形式からの影響を指摘した。しかし、一面では以上の考察を否定する考え方もできる。つまり、『漢音小経』以下の形式のように、必要最小限の構成要素で組立てられた形式に、特定他宗派からの影響を云々する余地はないとも考えられるからである。事実A—III・A—IVグループに考察を及ぼしてゆくと、必ずしも一面的な見方で片付けるわけにはいかない。そこで、この点に関しては、A—III・A—IVグループとのかかわりで後に改めて触れることとする。

注1 『声明集解説』作法篇

(三)

A—IIIは、宗祖親鸞を讃嘆する法要の諸形式である。『大師影供作法』と『報恩講作法』は、共に宗祖の生涯を偲び

表—D

退出部	勤修部													進入部	構成 法要 名					
	終結部			後置部	主部	前置部	展開部		導入部											
諸僧退出	導師降礼盤	伽陀	回向	教化	仏名	六種回向	献茶	画讃	祭文	献茶	教化	仏名	勸請	導師登礼盤	総礼	総詞	僧讃	諸僧入堂	御天台宗供	
諸僧退出	導師降礼盤	樂	回向句				念仏正信偈	画讃	頌讃					導師登礼盤		伝供・樂	五眼讃	音取	諸僧入堂	大師願寺派供作法

事蹟を讃える部分が中心となるが、前者は漢文、後者は和文の讃嘆句を用いる。また『広文類作法』と『二門偈作法』とは、親鸞の述作を奉唱する部分が中心となって、宗祖の教えを讃える。

右の『大師影供作法』には、表—Dに見るように、天台宗の『御影供』との関わりを指摘することができる。またそのかわり方は、A—IグループおよびA—IIグループの『読経作法』にみたと同様の手法によるものである。すなわち、中枢部の形式を引継ぎ、前後を取捨選択して形を整える。このような方法で基本的な形式を借りながら、内容に自宗の色彩を盛込んで天台的色彩を払拭する。具体的に記せば、天台『御影供』の眼目である『祭文』・『画讃』の部分の形の上では摂取しながら、漢文の弔詞である『祭文』に替えて教行信証の結句を『頌讃』として用い、『画讃』は唱句をごく簡略にし、代りに『念仏正信偈』を加えてこの部分に比重を置く。前後には『五眼讃』・『伝供』・『回向句』のみを配置してごく簡略にまとめている。

次の『報恩講作法』は、鎌倉時代以降彫しく制作された講式文の読誦作法である。これは日本で生まれた代表的な法要形式で、表—Eには天台宗の『二十五三昧式（六道講式）』の次第を併記したが、天台宗に限らず現在でも延暦寺・園城寺・金剛峯寺・智積院・法隆寺・唐招提寺など多くの宗派で勤修されており、本願寺派では、寛永頃の「報恩講」にこの法要形

表 E

退 出 部			勤 修 部										進入部	構成 法要 名					
			終 結 部		後置	主 部				前置	展開部				導 入 部				
諸僧退出		導師降礼盤	回向伽陀	念仏	結章	講式・念仏・偈文	講式・念仏・偈文	講式・念仏・偈文	講式・念仏・偈文	講式・念仏・偈文	阿彌陀經	四奉請	勸請	表來	如來	三	導師登礼盤	諸僧入堂	天台宗 二十五昧式
諸僧退出	止	導師降礼盤	導師登礼盤	回向伽陀	導師降礼盤	歎德文				式文・念仏・和讃	式文・念仏・和讃			表	至心	止	導師登礼盤	總音	本願寺派 報恩講作法

式が取入れられている。⁽¹⁾式文（講式文）と呼ばれる七五調の長大な詞章を何段かに分け、一段ごとに念仏や伽陀^{かだ}を挿入しながら全段を唱誦するという構成は各宗派に共通している。宗派によって構成次第の細部には異同があるが、『報恩講作法』は表 E に見るように中樞部から終結部まで天台系の形式を踏襲し、『偈文』の代りに〔和讃〕を用いて一般への親近化をはかり、『結章文』の代りに〔歎徳文〕を用いて宗祖讃嘆を強調する方法で独自性を加えている。ただし、講式作法に関しては特定宗派の法要形式との共通性のみを掲げて結論とするのは軽率であり、各宗派を通して別途考察すべき種々の問題があると思うし、それらの考察を経て正しく位置させるべきだと思うので、ここでは天台宗との法要形式上の共通性を指摘するに留める。

以上、A—Ⅲグループの二種の法要について形式上の考察を行なった。順序としては次の『広文類作法』と『二門偈作法』に移るべきなのだが、ここで法要形式にみる浄土真宗本来の特色について確認しておきたい。

論旨が飛躍するようだが、振返って表 E を眺めてみると、A—IグループからA—Ⅲグループまで、全法要形式の半ば以上に天台宗の法要からの影響を指摘する結果となった。そのかわり方に濃淡があり、その何れにも自宗の理念を盛込むことを忘れなかったにせよ、祖山指向の姿勢は歴然たるものがある。これに対して浄土真宗独自の法要形式が現存するの

勤修部				構成 法要 名	表—F
終部	結部	後置部	主部		
	回	讃	和	正	御逮夜
	向	仏	讃	信 偈	
	回	讃	和	—	朝勤
	向	仏	讃		
	回	和	讃	正	御日中
	向	向伽陀	念 仏	信 偈	
原本の記述が不明確なため「和讃」「讃念仏」の順とも考えられる					

退出部		勤修部										進入部		構成 法要 名	表—G	
		終結部					後置主部	前置主部	導入部							
諸僧退出	導師降礼盤	楽	—	—	—	—	回	念	入出二門偈	—	頌	導師登礼盤	楽	音	諸僧入堂	二門偈作法
諸僧退出	導師降礼盤		導師登礼盤	回	念	導師降礼盤	—	—	正信念仏偈	総	—	導師登礼盤		楽	音	

しないのか、現存するとすればどの形式なのか。それを明らかにしておく必要がある。

龍谷大学図書館所蔵の卷子本『慶長年間差定 八通』に、「報恩講七カ日御仕事勤之事」という一通がある。文末に「右之御定者天文十五年十一月十八日被仰出者也」とあり、行を改めて「干時慶長十二稔霜月廿一日」と記されている。内容は「報恩講（親鸞の忌日法会）」の法要について、所用声明の唱誦法を規定したものである。これによれば、慶長十二年（一六〇七）当時の「報恩講」は、天文十五年（一五四六）の制に従って七日間に亘る法会が執行されており、連日、連夜・朝勤・日中の三時に法要を勤修していたと思われる。そこで、右の文書から作成した当時の法要次第を、表―Fに掲げた。

先に述べたように、浄土真宗の法要形式が慶長年間以降に確立をみたとすれば、表―Fは、その初期の形態を具体的に示すものである。また「報恩講」は、宗祖親鸞の忌日法会という、宗派にとって最も重要な行事だから、そこで勤修される法要は宗派の代表的な法要形式だったと考えて誤りはない。以上を以て表―Fの次第を追ってみると、親鸞疏述の「正信偈」を第一に唱え（時によってはこれを省く）、次にその讃嘆歌である「正信偈和讃」を唱え、これに「念仏」と「回向文」を添えるのみで終了する。宗祖礼讃の意は尽しながら、莊嚴儀礼的な要素を全く省き、簡明直截な形式と、内容の純一性を際やかに示している。本稿に引用掲載した天台宗の法要形式のどれを取っても、主部の前の導入・展開・前置部などで本尊を讃嘆礼拝し、道場を莊嚴し、諸尊を勧請するなどの莊嚴儀礼的な作法があるし、主部の後には、趣旨の確認・敷衍や回向の作法が丁寧に繰返される構成となっている。このような事例にも明らかのように、南都諸宗から天台・真言に至る各宗派の法要形式が多分に儀礼的な装飾性を帯びているのにひき比べて、見事に対蹠的である。各地の庶民念仏集団を核として宗派形成を遂げたという体質を踏まえ、庶民性と儀礼性を止揚して制定されたのが、浄土真宗独自のこの法要形式だったと思われる。

ここでA―Ⅲグループの考察に立返り、『広文類作法』と『二門偈作法』を表―Fと対比してみる（表―F・G参

照)。宗祖の述作―念仏―回向という次第を勤修部に据えた表―Gの形式は、明らかに表―Fに導かれた形である。そしてこの場合は、これまでの対比例とは逆に、基本形式に奏樂を加え、導入部の讃嘆歌（頌讃）や法会の意義表明（総序）などの部分を加えて形式を整えたものと考えられる。宗祖への報恩謝徳を目的とする「報恩講」は、慶長期からすでに七日間に亘る大法会であったが、その当初は表―Fの法要のみを連日繰返して勤修した。しかし、時代と共に当初の簡明・純一指図だけでは不足となり、勤修法要の多様化をはかることや、既成の法要形式に儀礼的な莊嚴部分を付加する必要を生じた。このような経過をたどって定着した形式が表―Gの形式であり、A―IIIグループの中の、これらの形式であったと考えられる。

続いて表A―IVグループに目を転じたい。前述した経過は、このグループにもそのまま適用すると思われるからである。このグループの三法要の中、『円光大師作法』の主部である「三選章」では唱句に偈文を用い、『上宮太子会作法』と『奉讃早引作法』では「太子奉讃」と「早引和讃」という和讃を用いる。そして、それぞれに「念仏」・「回向」が続く。つまり、慶長期の「正信偈」―「和讃」―「念仏」―「回向」という形式を、偈文中心の形式と和讃中心の形式に分け、それぞれ前後に莊嚴部分を付加したのがA―IVグループの諸形式ということになり、浄土真宗本来の法要形式に拠って新たに作成した形式と考えられる。

さらに119～120ページに述べたA―IIグループに再び目を向けると、次のような解釈ができると思う。すなわち、A―IIグループの形式は、天台宗の『説経作法』をその準拠する形式としながら、一面では浄土真宗独自の形式への回帰意識があつて、『讀仏偈作法』・『重誓偈作法』・『讀阿弥陀偈作法』など、慶長期の原初形式を思わせるような素朴さを示す現形式が制定されたものではあるまいか。これらの諸作法の、明治期の形式が、現形式に比べてより天台色を濃厚に示していることによつても、その辺りのゆくたてを推察できる。

最後の表A―Vグループは、浄土真宗固有の法要形式とは思われぬが、天台宗のそれとのかかわりにおいて成立した

とは考えられぬものである。浄土宗の法要形式との関連を考えるべきものと思う。しかし、たとえば『浄土法事讃作法』を取上げて、善導大師にまで遡って別系列を追うことになるので、このグループに関しては稿を改めて取上げる
こととして、今回は割愛した。

以上、網羅的な考察はできなかったが、浄土真宗本願寺派の現行諸法要形式について、その特色を探った。そこに、もともと自宗独自の法要形式をもちながら、それに固執することなく、必要に応じて天台宗の形式を摂取して自宗の法要を多様化するという基本姿勢を見た。また、一般に非流動的と考えられがちな宗教儀礼が、思いの外に流動的であり、他宗派とのかわりにもかなり積極的であり得ることを明らかにし得たと思う。

最後に、この稿を執筆するにあたって、資料の閲覧・複写などに多くの便宜をおはらい下さった龍谷大学図書館の大原義行氏・田中利生氏と、表の作成をお手伝い下さった太田有喜子氏に心からお礼を申し上げて結びとする。

注1 龍谷大学図書館所蔵『本山年中行事』

参 考 資 料

『慶長年間差定』 龍谷大学図書館所蔵

『本山年中行事』 同右

『声明品』 同右

『梵唄集』 同右

『龍谷勤行要集』 勤式指導所編（永田文昌堂）

『声明集解説』 勤式指導所編（百華苑）